

ギヤスケル v. ギヤスケル ——ユニタリアン男性たちの言説とユニタリアン 女性たちの公共圏——

大石和欣

二人のギヤスケル

ウィリアム・ギヤスケルがマンチェスターのクロス・ストリート・チャペルにおいてサー・ジョン・ポターの葬儀説教を行ったのは1858年10月31日のことだった。このチャペルは、18世紀末以来マンチェスターに住むユニタリアンたちの信仰の場であったことはもちろんだが、自由主義を奉じる啓蒙的市民が寄り集う政治的要衝でもあった。ポターは其中でも傑出した信徒の一人であった。非国教徒であるがゆえに1807年の法改正まで法的差別を受けていたユニタリアンたちだが、産業資本家を含む富裕市民層が信徒に多く、マンチェスターの市民生活において多大な貢献をしていたことも確かである。それゆえに1835年に施行された新自治体法の下でマンチェスター市が誕生すると、ポターが初代市長に選ばれるだけでなく、ユニタリアンたちの多くが市の重職を担うことになった。

くだんの葬儀説教において、ギヤスケルは故人に理想のユニタリアン的美徳を見出している。第一に社会貢献という義務を果たす市民性である。富の追求は他者からの搾取ではなく、公共の福利の礎であると主張する。そうした「公共善」(Gaskell, *Duties* 8)を確保するためには、第二の美徳として「自制心と自己抑制」(7)が不可欠であると説く。最終的な美徳として位置づけられるのは「真の公共精神」(10)である。それは国民全体、政府、地域社会、施政を注視し、「社会全体の福利」(10)にかかわるすべてのことに旺盛な関心を養うことにほかならない。換言すれば、「地域社会の利益、知的文化、公共精神、愛国心、そして博愛に対する開明的な敬意」(11)なのである。

さらに加えて「自由」(11)を守る責務にも言及されているのも無視できない。フランス革命の理念に呼応して「普遍的仁愛 (universal benevolence)」を掲げ、イギリス国内における「自由」と「平等」、すなわち非国教徒に対する差別の撤廃と言論の自由を求めたジョゼフ・プリーストリーやリチャード・プライスなど

一世代前のユニタリアンたちの理想を反復していると言えよう。¹マンチェスターのユニタリアンたちが反穀物法同盟の主軸であったこともそうした政治的系譜の中で捉えることもできる。だからこそ上述の公共善と愛国心、博愛、自由の強調に注目したユニタリアン研究の泰斗 R. K. ウェブは、ウィリアム・ギャスケルの宗教言説が、18世紀末のプリーストリーの必然論を通底音として響かせた理性的ユニタリアニズムを継承している点で、同僚であったジェイムズ・マーティノーが標榜した情緒的なユニタリアン信仰と距離があると論じた (Webb, “The Gaskells” 144-71)。

しかし、はたして社会構造が目まぐるしく変化したこの時代において、半世紀余の間信仰を支える感性は同一でありうるのだろうか。疑念を抱くほうが自然な気がする。また、いずれにせよウィリアム・ギャスケルの宗教言説はその妻エリザベスの小説を解釈するに際してどれほど意味があるのであろうか。ギャスケル研究を俯瞰する限り、正面切って議論している論文は以下に述べるワイアットを除けば皆無である。ウェブ自身、ウィリアム・ギャスケルの言説の宗派内における位置づけに終始して、エリザベス・ギャスケルの小説との関係については言及を避ける。そもそもギャスケル小説は広い読者層への配慮から宗派性を表層から削ぎ落しているため、ユニタリアニズムを括弧に括って読んだとしても違和感はない。しかしながら、エリザベス・ギャスケルがユニタリアン牧師の妻であり、教会が運営する学校にも積極的かつ献身的に関与していたことを考慮すると、宗派性を無視して小説を読むことは言説を生み出した重要な思想的文脈、つまりは19世紀半ばのユニタリアニズムという重要なイデオロギーを黙殺することになってしまわないだろうか。ギャスケルは小説執筆の過程で表現・内容に関する夫のコメントを組み込んだことはよく知られているが、だとすればなおさらギャスケル小説を夫や同時代の宗教言説・文脈のなかで比較し、その肌理テクスチュアに織り込まれた思想と信仰を紡ぎ出す必要があるように思う。

その点、ジョン・ワイアットの2006年の論考は意義深い (Wyatt)。ウェブにならって上述の葬儀説教を時代遅れとして言及しながら、夫が市民の「良心」と「責務」だけを強調する一方で、妻の小説『北と南』は「良心」や「責務」の美德が「感情」との葛藤を喚起するように書き換えられたと指摘している。とりわけ慧眼なのは、夫が説教において強調する「自己卑下 (humility)」が小説内に

においてマーガレットの精神的成長を促すプロットへと転置されていると指摘した点である(108-10)。しかしながら、ウィリアム・ギaskellの宗教的立場はウェブやワイアットが主張するほど旧態依然としたものではないと私は考えている。また、『北と南』を背後から支えている宗教的理念はジェンダーと公共圏という枠組みの中に置いてはじめてその錯雑な肌理^{テクスチュア}の文様が開示されることになる。本論では19世紀半ばの宗教的文脈の中に『北と南』を置くことで、エリザベス・ギaskellが小説内で男性ユニタリアン言説をジェンダー的に転置していることを示す。

「良心」の自由とその代償

『北と南』のプロットを決定づけるのがヘイル牧師の宗教的疑念である。国教会の体制そのものに対するものなのか、信仰上のものなのか判然としないまま、とまどい悲しむ家族を道連れにして、「良心」ゆえにヘルストンの牧師館を去ってミルトン＝ノーザンへと移住する。ヘイル氏の疑念を描写した箇所は、小説を連載していた『家庭の言葉』の編集長ディケンズによって冗長だと批判され、ギaskellとの間に確執が生まれたいわくつきの場面だが、彼女にとって「良心」は、宗教的にも道徳的にも、さらには市民生活においても避けて通ることのできない重要テーマであった。割愛するなどもつてのほかである。「良心」へのこだわりはユニタリアン派の特徴でもあり、ヘイル氏の決断は、18世紀ユニタリアン派の開基とも言えるセオフィリス・リンジーが国教会からユニタリアン派へ改宗したことや、ユニタリアン派の牧師であった彼女の父親自身が給与を得て神に奉仕するのを潔しとせず、辞職して自活の道を選んだ経緯を想起させる。

実際、ウィリアム・ギaskellはポターの葬儀説教において、教会はもちろんのこと、市場でも、職場でも、通りでも、裁判所においてさえも「私たちの社会との関わりすべてに恩義と責任の鎖(A chain of obligations and responsibilities)が連なっている」のであって、「どこにおいても私たちの隣人への責務(duty)は私たちの良心(consciences)を礎にし、心に訴える」と力説する(Gaskell, *Duties* 11)。それを「寛容な自由の精神」(11)で行うことが愛国心と人間愛の目的であり、聖なる仕事であると主張する。

1790年代において「理性的非国教徒」と称された中流階級急進主義者たちの

多数を構成したユニタリアン派は「理性」の働きを強調したが、ウィリアム・ギヤスケルも「理性」と「良心」をユニタリアン派の信仰の中核であると擁護しているあたり旧弊である（Gaskell, “Strong Points” 107）。しかし、ポター氏の葬儀説教において「心に訴える」ことを強調し、信仰の情緒的要素へと力点を移している点で明らかに前世代のユニタリアンたちとは立ち位置がずれている。しかも、こうした責任感はいきなり社会で涵養されるわけではなく、子供部屋でのしつけや教育から育まれるものであり、些細な日常の家庭生活に由来し、そこから社会に広がっていくものであると主張しているのは（*Duties* 11）、福音主義の影響下で家庭を重んじるようになったヴィクトリア朝文化に即したもので、「良心」や「理性」を政治的美徳としてのみ限定してしまう前世代とは大きな隔りがある。

こうした情動に根差した「良心」を重視する態度は同時代のユニタリアンたちにも通底する。ギヤスケル夫妻とも親しかったリヴァプールの牧師ジョン・ハミルトン・トムは、ユニタリアンとして三位一体を否定し、キリストを至高の道徳的美徳の具現者として位置づけ、人びとの良心と良心的行動の源泉となっていると論じる（Thom, *Practical Importance* 5-6）。さらに、その良心の働きは理性ではなく心や魂と響きあうべきであると言う。ブリストルの「家庭伝道協会」に向けて行った説教では、伝道師たちの職務は「精神的なもの（spiritual）」であり、「それは心が心に、良心が良心に、魂が魂に、人間が人間に働きかけることである（It is heart acting on heart, conscience on conscience, soul on soul, man on man）」と、神の福音を貧しい人々の家庭に届ける精神的効果を強調した（*Religion* 28）。良心と良心の交感を含む人間同士の絆の根底に個人同士の「愛情」を据えている点は、前世代のユニタリアン派には見られないやはり新しい傾向である。

愛情は彼らにとって新たな生が息吹く唯一の源泉ですが、その愛情へと進みゆこうというのであれば、それぞれ一個人として人間に近づかなくてはなりません。群衆に向けられた言葉には、彼らに感性や性格などを叩きこませ、奮い立たせる力などありません。（26）

個人と個人との対話であることを重視するだけでなく、愛情を持った個人として良心に働きかけることを要求しているのである。

古いユニタリアニズムと一線を画す「愛情」の強調は広い視野から見れば福音主義の宗派横断的浸透の一現象だが、より直接的には同時代のジェイムズ・マーティノーの影響があると思われる。信仰の内面性、とくに感情性を強調することで、18世紀の理性的ユニタリアニズムから大きく舵を切る流れを作り出したのが彼である。マーティノーにとって「良心」は「個人の深い責任感情」であり、それは「責務についての心の奥深くに秘められた意識と深く調和」して潜在する「宗教の真の力」である(Martineau, *Christian View* 34)。著名な著作の一つである『キリスト教生活への努力』(1843, 1847)においては、宗教的、道徳的、社会的「責務」は「良心」が可視化され、外面化したものであって、その動力源として「真に完全なる意志 (the true perfection of the will)」に従った「愛情 (affections)」を措定する (*Endeavours* 1: 3-4)。彼にとって、宗教的精神の涵養と成長は、「新しく強烈な愛情 (new and intense affections)」によって導かれるのであり、「良心と理性」はそれを導くのではなく、その後に従うものである (1: 110)。ここにいたって「愛情」と「理性」の階層は逆転する。18世紀末のユニタリアンたちが理性と必然論を掲げて社会・政治改革を訴えたのに対し、マーティノーは愛情に基づいた社会的良心を信仰の基盤にしようとした。その意味で革命的であった。彼にとって「神は人類の本当の歴史と進展を個人の忠実さ、そして個人の良心の活力 (the energy of the private conscience) に託した」ことになるのである (1: 125)。

ウィリアム・ギャスケルは、「公平無私 (candour)」と「率直さ (openness)」を美德とし、とりわけ「真理 (truth)」にこだわる (Gaskell, *Address to the Students* 11-12)。「真理は真理であり、つねに善なのです。過誤は過誤であり、常に悪なのです」(Gaskell, *Unitarian Christians* 10)。その点で18世紀ユニタリアニズムの継承者には違いないが、必ずしも前世代のように理性のみに基づいて自然哲学や政治哲学の真理を探究しようとしたわけではない。背後に宗教的「良心」に合致する市民社会を支える美德としての「責務」を見据え、それを突き動かす動力源として人間の内面的感情を認めている。そこにヴィクトリア朝時代に芽生えた新しいユニタリアニズムの感性を読み取るべきではないだろうか。

女性的良心への転置

夫のコメントを取り入れながら執筆したエリザベス・ギャスケルの小説にもそ

んな新しいユニタリアンたちの宗教倫理が織り込まれている。夫ウィリアムや友人トムが典型的に示した真理への執着は、労働者階級たちの悲惨な生活環境を具に描写した『メアリ・バートン』の執筆動機や手法と呼応している。教会を媒介とした慈善活動や日曜学校への関与を通して、労働者たちの生活状況について直接的知識を持っていたギヤスケル夫人にとって、「労働者たちがどう感じ、どう考えているか」を描いて読者に示すことは責務であった（Gaskell, *Mary Barton* 26）。彼女の「正直に書く（write truthfully）」（8）という意図は、表面上はリアリズムといった小説技法上で片付けられがちだが、背後には「真理」を追究しようとする宗教的な動機が働いていたと考えられる。W. R. グレッグなどマンチェスターの資本家たちからも酷評を浴びる中で、ギヤスケルは「貧民たちの思考や感情を熟知している人びとは〔小説の描写〕が真実であると認めている」（Gaskell, *Letters* 827）と自負心を堅持する。虚構であるはずの小説においても、「嘘」ではなく「真理」にこだわる宗教的・倫理的態度が垣間見える。

実際にギヤスケル小説では「嘘」をつくことから生じる良心の葛藤が重要な宗教的テーマになっている。『ルース』において、主人公の素性をブラッドショーに隠していたベンスン牧師は、「わたしがついた嘘（deceit）は不正（wrong）であり、背信行為である（faithless）と認めます。（中略）そうすることで有益な道（a path of usefulness）が切り開かれるように思えたのです」と告白する（Gaskell, *Ruth* 259）。ベンスン牧師は福音主義者だが、有益性を重んじるのもユニタリアン的美徳であり、そのためについた「嘘」ゆえに良心の呵責に苦しみ続けるのは、「真理」や「真実」にこだわるギヤスケル夫妻の宗教観を濃厚に反映している。

『北と南』においてはヘイル氏もまた宗教的真理に執着する。信仰心を失っていたヒギンズと最初に論争したヘイル氏が言うのは、お互いに自由に語りあうことで「真理が勝つ（the truth will prevail）」（Gaskell, *North and South* 210）という信念であり、それは信仰と政治の自由をめぐる前世紀末以来論争し続けてきたユニタリアンたちに共有された考え方である。しかし、より重要なことは、兄を守るために不可避的についた「嘘」のためにマーガレットが苦しみ続けることであろう。それは単なる道義上の問題ではなく、「宗教上の過失」として認識されていく。そして、この真理と結びついた良心の問題をより社会的文脈で考え、捉えようとするのはヘイル氏ではなくマーガレット本人である。そこに意図

的なジェンダー転置がある。

『北と南』にはこれまで見てきたウィリアム・ギaskellやトム、マーティノーといった男性ユニタリアンたちの宗教言説と符合する言葉が頻出するが、それらは男性登場人物ではなく、マーガレットという女性によって代弁されていることは強調すべきだろう。労働者との関係を雇用関係のみで済ませようとするソーントンに対して、マーガレットは「たんなる金銭的利害関係 (cash nexus) 以上に労働者との交流を築く機会を持つ」(390) べきであると強い口調で説く。というのも資本家と労働者は相互依存の関係にあるからである。

「労働と資本というあなたたちの関係がどんなものであれ、それが理由ではありません。あなたは一人の人間 (a man) であり、あなたが実際に用いようが用いまいが、甚大な影響力を及ぼしてしまう人びとを処遇しているのです。あなたたち両者の生活と幸福 (welfare) は常に、そして密接に結び合っているのですから。神が私たちを相互依存関係にあるように創造り給うたのです。自分たちが労働者たちに依存していることを無視したり、彼らに私たちに依存しているのは週給の支払だけではないことを認めなくてもかまいません。でも、実際は互いに支え合っているのです。」(115)

マーガレットがここで主張していることは、ウィリアム・ギaskellが重視した社会全体を貫いている「恩義と責任の鎖」を彼女なりの言葉に置き換えたものにはかならない。

実際のところマーガレットがヒギンズ父娘と培う人間関係は、ヘルストンで暮らしていた際の牧師の娘と村人の階層的關係とは異なるより個人的な愛情や信頼関係を媒介にした心と心の交感である。だからこそ、労働者から距離をとったソーントンの人間関係を批判するのである。アイルランドからの移民労働者たちに職を奪われた労働者たちがソーントン家を取り囲んだ際に、警察が来るのを室内で待っているだけの彼に対して、マーガレットが「外に出て、彼らに話しかけなさい、人間として人間に対して話しかけなさい (go out and speak to them, man to man)」と檄をとばすが (164)、その言葉は既に引用したトムの言説と完全に一致している。いずれも、群衆への演説そのものには意味がなく、一個人たる人間として愛

情をもっては彼ら一人ひとりに近づくことを責務として標榜する。

結果的には群衆は暴徒化の兆しを見せ、彼女が抱きついて彼らの攻撃からソーントンを守ることになってしまう。しかし、誤解を呼ぶことになるその行為自体もまた「真理にかなっている」として彼女は倫理的正当性を確認する。その際に持ち出す「義務」という概念も「恩義と責任の鎖」というユニタリアン・イデオロギーの一変型である。

もし必要なら、彼女は同じことを明日にでもするだろう。足に障害のある乞食ならよろこびいさんでするだろう。でも彼であっても、彼が勝手な憶測をし、いけすかない女が冷厳無礼な態度を取ったとしても、もう一度勇敢にやるだろう。彼女がああした行動に出たのは、救うことができる状況にいるから助ける、いやせめて救おうとすることが正しく、誠意があり、真理にかなっている (right, and simple, and true) からだったのだ。「なにがあろうとも、なんじの義務を果たしなさい (*Fais ce que dois, advienne que pourra*)。」「(184)

ソーントン氏が最終的に悟るのはこうした「恩義と責任の鎖」によってつながった人間の絆が、社会全体の福利を構築し、地域社会の幸福を保証する土台になるということであり、それはウィリアム・ギヤスケルがポターの生涯に見出した市民的＝宗教的美徳である。しかも、それは、トムやマーティノーも強調したように「心と心」の交感によって成立する「義務感」である。

「偽証」という罪を心に抱えることになるマーガレットであるが、ソーントンとの関係で見る限り社会的価値観を変革する影響力を発揮する女性として位置づけられている。マーガレットの社会道徳観に敬意を示すように、ソーントンはヒギンズを雇用し、さらには労働者たちのために食堂を設え、福利厚生を充実させ、人間として対話をする努力を重ねていく。

いったん大衆から切り離れた個人として、雇用者と被雇用労働者という身分を抜きにして、顔と顔を突き合わせ (face to face)、人間と人間 (man to man) が対峙してみると、「我々はみな一つの人間の心を持っている」ということがそれぞれわかりはじめたのである。〈中略〉彼は工場主としての立場

において労働者の人びとに強く深い興味を憶えはじめていたのであるが、今になってやっとそのことに気づいたのである。それはひとえに彼が労働者たちときわめて身近に接触するようになり、その結果、うちとけず、ずるがしこく、無知ではあるが、とりわけ個性豊かで強烈な人間的感情をもった (strong human feeling) 人びとのなかで彼が強力な影響力を獲得することになったからなのだ。」(380)

「我々はみな一つの人間の心を持っている」はウィリアム・ワーズワスの詩「カンバーランドの老乞食」からの引用だが、ギヤスケルは1838年の書簡のなかで夫が労働者たちに詩の講義を提供することに触れ、この詩句が示唆する通り彼らが同じ人間らしい感情を持って日常生活を送っていることを指摘している (Gaskell, *Letters* 33)。ギヤスケルに対するワーズワスの影響にロマン主義性を認めることも可能だが、本論の趣旨から言ってより重要なのは、対社会的な「責務」や社会関係、「良心」の問題に、「理性」ではなく、「人間的感情」、精神的交感、「愛情」を基盤に据えることが18世紀のユニタリアニズムからの明らかな離反であり、マーティノーがけん引する新しいユニタリアニズムと呼応したものであるということだ。

女性たちと公共圏

しかし、男性ユニタリアンたちの宗教言説と小説テキストの間テキスト性を指摘して論を終えるわけにはいかない。エリザベス・ギヤスケルが「良心」や「責務」を男性ではなく、マーガレットに代弁させている点をもう一步踏み込んで考える必要がある。小説の中でヘイル氏は宗教的疑念ゆえにヘルストンの牧師職を辞任すると決心した後、実際の行動において主導権を取ることはない。引越しの段取り、ミルトンでの家探し、母親の看病に際しても常にイニシアチブと責任を負うのはマーガレットである。溺死したパウチャーの遺体が運ばれ、病弱なパウチャー夫人にそのことを伝えなくてはならない際、震えるばかりの父親や黙って引っ込んでしまうヒギンズに代わって、その役目を引き受けるのもマーガレットである。「私が行くわ (I will go)」(295) という言葉とともに、家の中に入りパウチャー夫人に真相を伝え、悲嘆に暮れる彼女に優しく寄り添うマーガレット

だが、彼女が用いた“will”という単語は未来時制を示しているのではなく、人間的感情と責任感によって支えられた断固たる意志から発せられたものである。それはまさに、『キリスト教生活への努力』においてマーティノーが唱導した、「真に完全なる意志」に従った「愛情」に突き動かされた宗教的、道徳的、社会的「責務」、つまり「良心」の具現化にほかならない (Martineau, *Endeavours* 1: 3-4)。つまり、国教会員でありながらマーガレットが女性として苦悩し、考え、行動しようとしているのは、男性ユニタリアン牧師たちが標榜している宗教的＝市民的美德なのである。そしてこのマーガレットの「意志」と「新しくて熱烈な愛情」、「良心と理性」 (*Endeavours* 1: 110) によって、ソートンもまた考え方を改めていくことになる。そうした道徳的感化力をもった存在がマーガレットであろう。

だからといってエリザベス・ギヤスケルが男性中心主義への反旗を翻すフェミニストであるということにはならない。マーガレットが遂行する「良心」と「責務」は市民の活動するいわゆる公共圏に及んでいるが、それは必ずしもソートンやヘイル氏が自由に行動する男性の公共圏と同質ではない。女性たちに許された公共圏においてマーガレットは「良心」を発揮し、「責務」を履行し、周囲の環境を変えていくことになるのである。

それはエリザベス・ギヤスケルの慈善活動と並行関係にある。彼女がユニタリアン派の平日・日曜女子学校に関与していたことはよく知られている。それは国教会と対峙しながら、民衆たちを啓蒙しようとするマンチェスターのユニタリアンたちのヴォランタリズムの一つである (大石)。男性たちが活躍する政治・経済の領域に対して、「家政」(oecomy) の延長線上にチャリティ・慈善活動を位置づけていた女性慈善家たちだが、それは従来の家庭空間あるいは「親密圏」から逸脱しないまま行う社会活動として定義されていた。マンチェスターにおいても、家庭伝道協会や男子学校が男性だけによって運営されていたように、女性たちの社会活動の範囲は男性たちの公共圏とは異質であった。しかしながら、だからといって、彼女たちが公共圏から疎外されていたことにはならない。国教会と非国教徒諸派にとって学校教育は社会における自分たちの宗派的覇権を左右する政治的問題であり、女性たちが関与する女子学校も例外ではない。「家庭の天使」として家庭の道徳を守ることと、社会の倫理を正しい方向に導くことは彼女たちにとっては同一線上の行動であった。

もちろん、急進的なユニタリアン女性たちの活動がなかったわけではないが、通常の中流階級女性であっても社交、ショッピング、慈善活動などを通して自分たち自身の「公共圏」を構築し、家庭の延長線上のなかで動いていたことはレオノア・ダヴィドフおよびキャサリン・ホールが詳らかにした通りである (Davidoff)。つまり、女性たちは男性たちの公共圏と差異化しつつも、「分離領域」では割り切れない独自の生活・社会活動領域を切り開いていったのである。ユニタリアン派の女性たちも、表向きは男性の社会活動を補完する役割に自らを位置づけながらも、複層的な社会活動の領域と親密圏を往来していたのである。

ギヤスケルの小説もまた、男性ユニタリアンたちが標榜した宗教的＝市民的美德を共有し、それが主人公たちの道義的判断を裏打ちしているが、それを遂行するのは女性たちである。女性主人公たちは、限定された独自の公共圏のなかでその美德を発揮し、男性中心の公共圏へと影響力を波及させていく形を取る。もちろんそれは彼女たちの抱える限界を露呈することにもなる。しかし、田村真奈美の用語を借用すれば、牧師夫人として教育・啓蒙活動に関与していたエリザベス・ギヤスケルにとって、小説は言説を通して社会の正義と真理を問いただしていく重要な宗教的「責務 (ミッション)」の一貫であり (田村)、その意味でユニタリアンの信仰や伝道と軌を一にした女性のユニタリアン言説であると言えよう。

注

※本論文は、平成 26 年 10 月 4 日の日本ギヤスケル協会第 26 回大会 (於明治大学駿河台キャンパス) のシンポジウム「ヴィクトリア朝小説における社会領域とジェンダー」での研究発表である。

1 ユニタリアン派の信仰と政治的立場については Michael R. Watts; Webb, “Unitarian Background” 1-30; Hall に特に詳しい。

引用文献

- Davidoff, Leonore, and Catherine Hall. *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class, 1780-1850*. Chicago: U of Chicago P, 1987.
- Gaskell, Elizabeth. Mary Barton: A Tale of Manchester Life and *William Gaskell*, “Two Lectures on the Lancashire Dialect”. [*The Works of Elizabeth Gaskell, Volume 5*]. Ed. Joanne Wilkes. London: Pickering, 2005.
- . *North and South*. [*The Works of Elizabeth Gaskell, Volume 7*]. Ed. Elizabeth Jay. London: Pickering, 2005.
- . *Ruth*. [*The Works of Elizabeth Gaskell, Volume 6*]. Ed. Deirdre d’Albertis. London: Pickering, 2006.
- . *The Letters of Mrs. Gaskell*. Ed. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Gaskell, William. *The Duties of the Individual to Society: A Sermon on Occasion of the Death of Sir John Potter, M.P.* London: Whitfield, 1858.
- . *Address to the Students of Manchester New College, London, Delivered after the Annual Examination, on June 23rd, 1869*. Manchester: Johnson, 1869.
- . *Unitarian Christians Called to Bear Witness to the Truth: A Sermon, Preached before the Supporters of the British and Foreign Unitarian Association, at their Annual Meeting, in Essex-Street Chapel, London, June 11, 1862*. London: Whitfield, 1862.
- . “Strong Points of Unitarian Christianity.” *Unitarian Christianity: Nine Essays*. London: Unitarian Association, 1912. 85-112.
- Hall, Alfred. *The Beliefs of a Unitarian*. London: Lindsey, 1932.
- Martineau, James. *The Christian View of Moral Evil. A Lecture, Delivered in Paradise Street Chapel, Liverpool, on Tuesday, April 30, 1839*. Liverpool: Willmer, 1839.
- . *Endeavours after the Christian Life: Discourses*. 2 vols. London: Unitarian Association, 1907.
- Thom, John Hamilton. *Religion, the Church, and the People: A Sermon Preached in Lewin’s Mead Chapel, Bristol, September 23, 1849, on Behalf of the Ministry of the Poor in Bristol*. London: Chapman, 1849.
- . *The Practical Importance of the Unitarian Controversy: A Lecture Delivered in*

Paradise Street Chapel, Liverpool, on Tuesday, February 12, 1839. Liverpool: Willmer, 1839.

Watts, Michael R. *The Dissenters: Volume II; The Expansion of Evangelical Nonconformity.* Oxford: Clarendon, 1995.

Webb, R. K. “The Unitarian Background.” *“Truth, & Liberty, & Religion”: Essays Celebrating Two Hundred Years of Manchester College.* Ed. Barbara Smith. Oxford: Manchester College, 1986. 1-30.

---. “The Gaskells as Unitarians.” *Dickens and Other Victorians: Essays in Honour of Philip Collins.* Ed. Joanne Shattock. London: Macmillan, 1988. 144-71.

Wyatt, John. “The Inoffensive Philanthropist: The Way of Humility in *North and South.*” *The Gaskell Society Journal* 20 (2006): 102-14.

大石和欣「ヴォランティアリズムとジェンダー — 文学と歴史の境域 —」『ヴィクトリア朝文化研究』第12号（2014）、53-60頁。

田村真奈美「ミッション — 女性の使命と作家の使命 —」松岡光治編『ギヤスケルで読む ヴィクトリア朝前半の社会と文化』溪水社、2010年。365-81頁。

（東京大学准教授）

Abstract

**Gaskell v. Gaskell: Male Unitarians' Discourses
and the Public Sphere for Unitarian Women**

Kaz Oishi

The article illustrates the intertextuality between Elizabeth Gaskell's *North and South* and the socio-religious discourses of male Unitarians, such as William Gaskell, John Hamilton Thom, and James Martineau. R. K. Webb and John Wyatt both view William Gaskell as an old-fashioned Unitarian who held to the rational principle of liberty and philanthropy shared by late-eighteenth-century Unitarians. But a careful examination reveals that his discourses also emphasise the virtue of "conscience" nurtured at home and motivated by affections, marking a departure from the old tenet towards the new Unitarianism initiated by Martineau with an emphasis on "intense affections" and the "true perfection of the will" as a motive for faith and conscience. *North and South* reflects this new ideal through the character and actions of Margaret Hale. After her father's recantation, she begins to take an initiative not only in performing domestic duties, but also in exerting a moral influence upon men in the public sphere. Her dictum to John Thornton, "Speak to your workmen as if they were human beings. . . . go out and speak to them, man to man!", manifestly echoes the male Unitarians' argument for truth, conscience, and affections, especially John Hamilton Thom's stress on "heart acting on heart, conscience on conscience, soul on soul, man on man." By making Margaret an agent of Unitarian moral ideals, Elizabeth Gaskell deliberately displaces the gender roles, if not the gender hierarchy, and reconsiders women's position in the public sphere.